

中世成立期東国武士団の婚姻政策

—伊豆国伊東氏を主な素材として—

坂井孝一

はじめに

鎌倉幕府の成立前夜および幕府の草創期という中世成立期において、東国武士団は自身の存立や勢力の拡張のために様々な選択を迫られた。それは、平氏につくか源氏につくかといった合戦のレベルから、どの武士団と協調し、どの武士団と対抗関係に入るかといった平時のレベルに至るまで各種各様であった。婚姻もその一つである。婚姻によって他の武士団と姻戚関係に入れば、戦時においてその武力を期待できたからである。武士団にとって婚姻は、いわば安全保障の手段の一つであり、どの武士団と姻戚関係を結ぶかという選択は重要な政策であった。しかし、網の目のように張りめぐらされた東国武士団の姻戚関係の全貌を捉えることはなかなか難しい。手がかりとなる系図類には、婚姻に関わる記載が極めて少ないからである。そのため、各種の記録や物語の断片的な記述を集積して系図の記載と照合し、総合的に判断する

以外に有効な方法はない。

そうした中であつて、『曾我物語』、とくに「真名本」の巻五^(二)をはじめとしたいくつかの叙述は貴重である。『曾我物語』は、周知の如く、源頼朝が征夷大將軍に就任した翌年、建久四年（一一九三）五月廿八日に起きた富士の裾野における曾我兄弟の敵討ちを描いた軍記物語である。無論、文学作品である以上、その叙述のすべてを史実と認めることはできないが、鎌倉末期に東国で成立したとされる「真名本」は、『曾我物語』諸写本の中でも最古態を示すテキストであり、中世成立期の東国社会の一面を伝える史料として十分に活用可能である。その巻五には、曾我十郎祐成が、親や師の意向に背いて元服した弟の五郎時致を伴つて、相模の親族の間を止宿する場面^(三)があり、その中に「和田左衛門義盛母方伯母聾」「早河父方伯母聾」といった曾我兄弟の姻戚關係を示す表現が集中的に現れるのである。これほどまとまった武士団の姻戚關係を示した叙述は他に類例がない。また、「真名本」には後述するように、他にも婚姻について叙述した箇所がある。こうした「真名本」の叙述に注目した石井進氏は、伊豆・相模・武蔵の武士団の姻戚關係を系図の形にまとめ上げ、菱沼一憲氏^(四)は、海上・陸上交通による武士団のつながりに着目して、駿河の武士団を含む東国武士団の姻戚關係、その政治的・経済的な連携について明らかにした。本稿は両氏の研究に学びつつ、曾我兄弟の祖父にあたる伊豆国の武士伊東祐親を主な素材として、中世成立期の東国武士団の婚姻政策について考察したい。

第1節 伊東祐親の婚姻ネットワーク

まず、少し長くなるが、曾我兄弟が親族の間を止宿してまわる「真名本」巻五の叙述^(五)を引用してみよう。

①打烈所^レ遊何々、三浦介義澄伯母聾、是五六日遊、和田左衛門義盛母方伯母聾、是二三日遊、渋谷庄司重国母方従父聾、是五六日、本間・海老名付^二母方^一親、此等二三日、渋谷姉聾、是十四五日、早河父方伯母聾、是十四五日、秦

野権守父方従父、是五六日、為^二此遊彼笠懸射^一程、月二月三月馳過、伊藤一門広上、母渋谷庄司重国女房妹、本間権守他腹姉、秦野権守能常娘、伊豆国住人鹿野介茂光、娘子孫子、而為^二助成・時宗^一、父方伊豆豪家、母方相模国御家人達、復北条殿昔姫、申^二鎌倉殿御台繁所御母、時政先女房^一、為^二此等^一父方伯母、佐北条殿不忘^二昔縁^一、成^二三元服子^一、加様引立、岡崎四郎義実女房、北条先女房御妹、為^二彼等^一岡崎伯母、鹿野介姫君九人御、幸^二彼此^一故、其一門広、依^レ之、北条・早河・鹿野・田代・土肥・岡崎・本間・渋谷・海老名・渋美・松田・河村・秦野・中村・三浦・横山人々同心、有^二便宜^一申^二訴詔^一被^レ思^二合引助^一折節、討死失悲、畠山・梶原付^二女房方^一有^レ縁、是被^二思合^一、

これが「真名本」巻五に見える曾我兄弟の親族に関する叙述である。かつて石井氏が「鎌倉幕府成立期に活躍する相模・伊豆の有力武士団のほとんど全部が、まるでキラ星のように居ならんでいる」と評したように、驚くべき数の武士団の名が列挙されているのである。「曾我物語」が「揃い物」「名寄せ」と呼ばれる技法を特徴とする「曾我語り」をもとに成立した文学作品であることを考えると、そのすべてが史実を伝えているとは考えにくい。叙述の進め方を見ても、継ぎはぎをしたような不自然なつながり方がいくつも見られる。たとえば、「是五六日遊」「是十四五日」のごとく滞在日数を挙げている最初の数行と、それ以降の部分では若干叙述の仕方が異なっている。また、いったん「為^二助成・時宗^一、父方伊豆豪家、母方相模国御家人達」と話をまとめたにもかかわらず、「復北条殿昔姫」のごとく、また別の御家人の話題を展開し始めるといふ不自然さが見られる。さらに、曾我兄弟について「討死失悲」と記し、親族関係の話題を終わらせておきながら、なお「畠山・梶原」のことを付け足すように記している。こうした叙述のあり方は、この記事が「揃い物」「名寄せ」としての性格を持っているというだけでなく、増補に増補を重ねて現存「真名本」の形になったということを示唆しているといえよう。とすれば、増補された箇所には史実でない情報が含まれている可能性があると考えられ、慎重な扱いが必要となる。しかし、滞在日数を明示する最初の数行については、逆にある程度の信憑性が確保されたと考えて

よからう。そこで、この部分を中心に曾我兄弟の父方の姻戚関係、言い換えるならば、伊東祐親の推し進めた婚姻について見ていきたい。

①の中で、「父方」の親族とされたのは「早河」と「秦野権守」である。「早河」は相模国の西端、伊豆との国境付近を本拠とする土肥実平の嫡子早川遠平、「秦野権守」は相模中西部の秦野盆地を本拠とする波多野権守能常のことを指している。また、ここでは父方とも母方とも明記されてはいないが、記事の冒頭に挙げられた「三浦介義澄」も、伊東祐親の娘を妻とする父方の親族であったことがわかつている。一方「母方」とされたのは「和田左衛門義盛」、「渋谷庄司重国」、「本間・海老名」である。このうち「本間・海老名」という表現で記される人物は、本間右馬允義忠の父、海老名季貞（季定とも）と思われる。他に、「姉婿」として「洪美」が挙げられているが、これは曾我兄弟の異父姉の嫁ぎ先である二宮朝忠のことである。後述するように、曾我兄弟の母は河津三郎と結婚する前に、伊豆国の目代左衛門尉仲成という人物と婚姻関係を結び、一男一女を産んでいた。その女子を、相模湾沿岸の国府津付近、二宮荘を本拠とする朝忠が妻に迎えたのである。

一見して、曾我兄弟の親族には相模国の武士団、とくに相模湾沿岸を本拠に持つ武士団が多かったことがわかる。つまり、伊東祐親が推し進めた婚姻は、相模の武士団との連携を狙ったものだったのである。その背景には、菱沼氏も指摘しているように、海上交通を通じての武士団相互の交流を想定すべきであろう。三浦半島を本拠とする三浦氏は、房総半島へも勢力を伸ばしている武士団であり、源頼朝挙兵に際して、畠山重忠ら武蔵の武士団の攻撃を逃れ、船を出して安房に渡ったことは周知の事実である。また、早川遠平の父土肥実平も、石橋山の合戦後、真鶴岬から船を出して頼朝を安房に導いている。さらに、祐親は平氏軍に加わるため、伊豆の「鯉名泊」に船を浮かべているところを天野遠景に生け捕りにされたという。^(八)これらの出来事は、三浦氏・土肥氏・伊東氏が船を用いて海上交通を自由に操っていたことをうかがわせるものであり、彼らが騎馬による戦いだけでなく、水軍を保有し、海における戦いにも長けていたことを示すものである。

そもそも、彼らの所領は海に面しており、現在でもこれらの地が港として機能しているように、彼らも海上交通という利点を活かさないはずがなかった。そして、婚姻は、こうした海上交通を通じた連携をさらに強化するものだったと考えられる。

一方、父方の親族とされる波多野能常については、同じ相模国の武士であっても、三浦氏・土肥氏の場合と若干事情が異なる。『秀郷流系図松田』^(九)に、波多野義常が工藤祐経の父伊東祐継の娘を妻として波多野（松田）有常をもうけたという記述が見られるからである。もしそうであったとすれば、この婚姻は祐親が推し進めたものではなかったということになる。ただ、伊東氏の婚姻政策という枠で捉えることは十分可能である。そこで、波多野能常については伊東氏と波多野氏の関係という形で考えてみたい。

その場合、注目すべきは波多野氏の本拠波多野荘の地理的な位置である。波多野荘は、三浦氏や土肥氏の本拠のように相模湾の沿岸部に位置しているのではなく、やや内陸部の、金目川とその支流水無川の上流域にある。東に進めば、岡崎・糟屋・愛甲・海老名といった武士団の本拠があり、陸上交通によってこれらの地域とつながりを持っていた。ただ、水上交通について無縁であったかという点、必ずしもそうではない。確かに、水無川はその名の通り普段は水量が少ないが、水上交通の存在を示唆する「入船」という地字も残っており、波多野氏が秦野盆地東端を流れる金目川を利用していた可能性は否定できない。また、波多野義常の子息松田有常の本拠松田郷は、丹沢山塊及びその南麓に位置し、流れがゆるやかで比較的川幅の広い酒匂川（鞠児川）が郷内を流れている。ちなみに、そのやや上流に同族の河村氏の本拠河村郷があった。「河村＝川村」という名が示す通り、このあたりは中世以前には酒匂川の川床か河原であり、近世には洪水に悩まされた地であるという。金目川や酒匂川といった河川が波多野一族の本拠地、波多野荘や松田郷の中を流れているわけであり、これは波多野氏が、陸上交通によって相模国東部や武蔵国とつながっていただけでなく、河川を通じて相模湾とのつながりを確保していたことを想起させる。とすれば、伊東氏と波多野氏との間に水上交通によるつながりが全くな

かったとは言いい切れなくなろう。しかし、いずれにせよ、伊東氏にとって波多野氏は、相模中部・東部の武士団との連携の足がかりになるような存在であったことは確かであろう。

ところで、こうした伊東祐親の婚姻ネットワークは、どの婚姻を起点として作り上げられたのであろうか。地理的な距離からいえば、伊豆国境の土肥氏が最も近く、次いでやや内陸であるが波多野氏、最も遠いのが三浦氏である。しかし、「真名本」巻二には、「伊藤次郎助親候娘四人、弟一三浦介義澄女房、弟二相模国住人土肥次郎実平（第）妻女、三四未レ在二親許一」との記述が見られる。（一〇）つまり、祐親は長女を三浦義澄と、次女を早川遠平と結婚させたのである。しかも、次女の場合、工藤祐経と結ばれていながら所領相論の過程で離別、早川遠平に再嫁させられたという特殊事情がある。とすれば、やはり年長である長女と三浦義澄との婚姻が、一連の婚姻ネットワークの起点となったと見てよからう。そこで、この婚姻を素材に伊東氏と三浦氏との関係について考えてみたい。

まず、十二世紀半ばまでの段階であるが、両者の連携については確認できない。伊東氏は、祐親の祖父寂心（俗名工藤祐隆）および伊東祐継が中心となつて活動していた時期に当たり、伊豆半島東岸の開発・経営に力を注いでいたと考えられる。祐親自身も、まだ「河津次郎助親」（二）と名乗って伊東荘南方の河津荘を領していた段階で、伊東氏の中で主導権を握っているわけではなかった。

一方、三浦氏は義継・義明の代に当たり、房総半島の上総で成長して「上総曹司」と呼ばれた源義朝を鎌倉に迎え入れた時期である。天養元年（一一四四）、義朝は鎌倉党の本拠である大庭御厨に乱入する事件を起こすが、その背後に義明の力が働いていたことは明らかである。つまり、義明は義朝とその長男悪源太義平を擁して、房総半島から相模東部に勢力を築こうとしていたと考えられるのである。

その後、義朝は義平を義明に託して上洛する。そして、義平を擁した義明の目は武蔵国に向けられるようになる。当時、武蔵国では、秩父一族の家督・武蔵国留守所惣検校職をめぐり、秩父一族内で畠山重能とその叔父重隆の勢力争いが続い

ていた。ここに源義平と叔父の義賢との争いが結びつき、久寿二年（一一五五）八月、武蔵国の大蔵館で、保元の乱の前哨戦ともいふべき「大蔵合戦」が起こる。戦いは義平・重能方が義賢・重隆を討ち滅ぼして決着がつき、秩父一族内の主導権は重能が握ることになった。三浦義明が娘を畠山重能と結婚させたのはこの時期である。義明は重能を聲に取って連携を強化することにより、秩父一族の軍事力を期待することができるようになり、また畠山重能にとっても、源義朝・義平と近い相模の大豪族三浦氏と姻戚関係を結ぶことは、武蔵国における軍事的・政治的優位を確立するのに効果が期待できた。

ところが、平治の乱により情勢は一変する。源氏は没落、秩父一族の族長権は重隆系の河越氏に移り、武蔵守の地位も、義朝に近い藤原信頼・信説兄弟から平氏の平知盛に代わった。^(二二)これにより、三浦氏の戦略も変更を迫られることになったと推察される。

ちょうど同じ頃、次節で詳述するように、伊東氏の内部でも変化が起こっていた。伊東祐継が四十三歳で病死し、祐親が伊東氏内部の主導権を握るようになったと考えられるのである。数年後、祐親は次女の万劫と工藤祐経を結婚させているので、長女の智探しはそれ以前から始めていたはずである。それはいつか。ここで注目すべきは、三浦義澄を父、伊東祐親の長女を母に持つ三浦義村^(二三)の誕生である。義村の正確な生年は不明であるが、没年が延応元年（一二三九）であること^(二四)と、また同世代の北条義時が応保二年（一二六二）の生まれで、元仁元年（一二三四）の没であること^(二五)などから考えて、義村は平治の乱後に生まれたものとみなして大過ない。とすれば、義村の父義澄と祐親の長女が結婚したのも、平治の乱後さほど時を経ぬ頃であったとみてよからう。つまり、三浦氏は義明の代から子の義澄の代に移行するのに伴い、その進むべき道を陸上交通でつながる武蔵国の秩父一族との連携から、平氏の家人であり、海上交通でつながる伊豆東岸の伊東氏との連携へと、方針転換したといえるのである。無論、これは祐親にとってもまさに〈渡りに船〉であった。かくして三浦義澄と伊東祐親長女の婚姻が成立し、祐親による相模の武士団を取り込む婚姻ネットワークの形成が始まったと考えら

れる。

以上のことから、曾我兄弟の祖父伊東祐親の婚姻ネットワークは、海上・陸上交通によるつながり、「大蔵合戦」や平治の乱のような事件、そして武士団相互の政治的・軍事的思惑といった条件が複合的に絡み合って形成されたものであり、政策的な意味合いが極めて強いということが明らかになったと考える。では、曾我兄弟の母方についてはどのような性格が読み取れるであろうか。次節では、兄弟の母の婚姻を素材に考察を加えてみたい。

第2節 曾我兄弟の母の婚姻

曾我兄弟の母は生涯に三度の婚姻を経験している。最初の夫が、前述したように伊豆国の目代左衛門尉仲成、次が兄弟の実父河津三郎、最後が兄弟の継父となった曾我太郎祐信である。一人の女性が三度も婚姻を繰り返すというのは、離婚率の高まった現代においてもあまり例のないことである。しかも、第二の夫、河津三郎とは暗殺による死別という悲劇であった。彼女の婚姻が自ら望んだ幸せなものばかりではなかったというのは、容易に想像のつくところである。では、「真名本」はこれらの婚姻についてどのように叙述しているのであろうか。先掲の①に続いて、「真名本」巻五は十郎が異父兄「京の小次郎」に敵討ちの助力を頼む場面を設けているが、その中に次のような叙述がある。^(一六)

②申「此京小次郎」、為「此等」一腹兄、自「河津三郎」先、伊豆国国司源三位入道頼政嫡子、伊豆守仲綱乳母子云「左衛門尉仲成」一人、被「下」国司代「程」、時威付、鹿野介我孫子取「聿」、如「是」経「二年月」程、男子一人女子一人儲、申「男子」今京小次郎是、申「女子」今「淡美地頭」二宮太郎婦妻是、此左衛門尉仲成国得替上時、可「引」二「具」妻子「思」由、祖父鹿野介不「レ」斜糸惜不「レ」放「身」思上、母折節有「二」病惱「一」、追可「レ」奉申、不「レ」及「力」預「外」戚祖父「上」洛、其後成「河津三郎」婦妻「送」二年月「程」、男子三人儲、今十郎助成、五郎時宗、伊藤禪師是、

これによれば、伊豆国の有力在庁「鹿野介」すなわち狩野茂光は、自分の孫娘である兄弟の母を、まず源三位頼政の嫡子「伊豆守仲綱」の「乳母子」で、目代として伊豆に下つてきていた左衛門尉仲成と結婚させたという。この婚姻は「時威付」とあるように、茂光が目代の権勢に乗じようとした政策的なものであった。兄弟の母は、仲成との間に京小次郎と二宮朝忠の妻という二人の子を産んだが、仲成が「国得替」して上洛する時、茂光が引きとめたため伊豆に残り、結果的に最初の夫仲成とは別れることになってしまった。しかし、その後、伊東祐親の嫡子河津三郎に再嫁し、曾我兄弟と「伊藤禅師」という三人の男子を産んだのである。

兄弟の母は、この②の叙述から、もっぱら狩野茂光の孫娘として扱われてきた。無論、それは間違いないことなのであるが、彼女の父が誰であったのかという問題についてはこれまでほとんど取り上げられてこなかった。それは恐らく「真名本」に彼女の父に関する叙述がないからであろう。ただ、東国武士団の婚姻について考える上で父親の問題は無視するわけにはいかない。そうした意味で注目し値するのは菱沼一憲氏の論考である。氏は「小野氏系図横山」^(二八)『海老名萩野系図』^(二九)の記述をもとに、彼女の父を武蔵国多摩郡に本拠を置く小野姓横山党の横山時重に比定している。極めて妥当な見解である。さらに氏は、『曾我物語』に横山時重の名が明記されていないのは兄弟の母が狩野氏の手許に引き取られていたためであること、先掲①の狩野茂光縁故の面々の内に「横山」の名が見えるので、横山党と狩野氏の間に連携が存在していたと確認できること、などの諸点を指摘している。

では、②の叙述から、兄弟の母の婚姻がいつ頃のことであったのか読み取ることができるのであろうか。最初の夫、左衛門尉仲成という人物に関しては未詳であるが、もし源仲綱の「乳母子」ということが事実であったとすれば、そうした人脈により目代に起用されることは十分にあり得ることである。『兵範記』^(三〇)の記事から、仲綱は仁安二年(一一六七)に伊豆守であったことが確認できるので、仲成の伊豆下向はそれ以前であり、第一の婚姻も仁安二年以前ということになる。その後、伊豆守の交代があつたか否かは不明であるが、『吉記』^(三一)の記事によって、安元二年(一一七六)にも仲綱は伊豆守

であつたことがわかる。一方、承安二年（一一七二）以降、伊豆の知行国主として仲綱の父頼政の名が見られるようにな
 る。これらのことを考え合わせると、仲綱がいったん伊豆守を退く時期があつて、目代の仲成もその時に「国得替」して
 上洛したか、もしくは仲綱は伊豆守に重任したものの、任期の切れ目に仲成が上洛したとみなしていいのではないか。い
 ずれにせよ、仲成の上洛は仁安二年からさほど時を経ぬ頃という可能性が高い。とすれば、第二の婚姻、つまり河津三郎
 への再嫁の時期もこのあたりであつたということになる。

ところで、河津三郎が工藤祐経の刺客八幡三郎の矢によつて横死したのは、安元二年（一一七六）、三十一歳の年であつ
 た。長男の一万はその時五歳であつたから、承安二年（一一七二）、河津三郎が二十七歳の時に生まれたわけである。一般
 的にそうであるように、兄弟の母が河津三郎より年下であつたとすれば、一万の出産時には二十六歳以下ということにな
 る。一万出産以前に、彼女は仲成との間に一男一女を儲けていたのであるから、二十歳前後に相次いで二人の子どもを産
 んだと考えたと、それは仁安元年（一一六六）から、遅くとも同三年（一一六八）までのことになる。これは、第一の婚姻
 が仁安二年以前、第二の婚姻が仁安二年からあまり時を経ぬ頃であつたとする先の考察とも矛盾しない。

では、この仁安二年を程経ぬ頃というのは、どのような時期だったのであろうか。ここで注目したいのは「真名本」巻
 一に見える次の叙述である。

③金石付ニ心安乳母ニ養、不違ニ遺言ニ、申二十三成男、名ニ乗宇佐美宮藤次助経ニ、合ニ娘万劫ニ、然後次年秋引具
 上洛、小松内大臣重盛其比御ニ在大納言ニ入見参ニ、則本家私ニ候大宮ニ、置レ都、下為ニ追上ニ、其後伊藤・河津助
 親一人押領、助経不レ配ニ分屋敷一所ニ、（中略）宇佐美宮藤次助経自二十四歳年一候ニ武者所未座ニ、依レ正ニ礼儀ニ、
 人皆感レ之、田舎侍中申ニ合心苦ニ、廿一経ニ武者所一郎ニ被レ呼ニ宮藤一郎助経ニ、依レ之我身在京朝暮至ニ訴詔ニ間、
 難レ遁ニ道理ニ於ニ所帯ニ半分可ニ知行ニ由賜ニ本家大宮領司并領家御教書ニ、下ニ向本国ニ

すなわち、伊東祐継の死後に起きた所領相論の経緯について説明した叙述である。これによれば、まず祐親は祐継の遺

児「金石」、後の工藤祐経を「十三」歳で元服させ、自分の次女「万劫」と結婚させたという。次いで翌年の秋、祐経が「十四歳」の時に上洛して、その頃「大納言」だった領家の「小松内大臣重盛」の見参に入れ、本家の「大宮」藤原多子の許にも伺候させた。そして、祐経を「武者所」に置いたまま自分は本国に戻り、実質的に所領を押領したのである。しかし、祐経は礼儀を正しくして人々に賞賛され、「廿一」歳の若さで武者所の「二郎」、つまり筆頭の地位に昇り、在京の身を活かして本所に訴訟を繰り返した。その結果、「於三所帯半分可知行」という裁定を得て、本国に下向したのである。ただ、この後も両者の確執は続き、祐親によつて妻との仲を裂かれた祐経が、年来の郎従大見小藤太・八幡三郎に祐親父子の暗殺を命じたのは安元二年のことであった。

この③には祐経の年齢に関する叙述はあるものの、年号は記されていない。そのため、これらの出来事がいつ頃のことであったのか客観的に把握するのは難しい。しかし、考察の糸口がないわけではない。「小松内大臣重盛其比御」が大納言「入見参」という表現が見られるからである。平重盛が権中納言から権大納言に昇任したのは、清盛が従一位太政大臣の地位に昇った仁安二年（一一六七）二月十一日であった。^(二四)同年、賊徒追討の宣旨を受けた重盛は、以後、平氏軍政の中心的役割をはたすようになる。『公卿補任』によれば、重盛は仁安三年（一一六八）十二月十三日、病氣により権大納言を辞すが、嘉応二年（一一七〇）四月廿一日に更任。しかし、同年末に再び辞し、一年後の嘉応三年（一一七二）十二月八日、三度目の還任を果たす。そして、権大納言のまま約四年の月日を過ごした後、安元元年（一一七五）十一月廿八日、大納言に転任し、安元三年（一一七七）治承元年（一一七七）三月五日、内大臣に昇進する。つまり、重盛が「大納言」であったのは、権官の時期を含めると、仁安二年から安元三年に至る約十一年間だったわけである。

十四歳の祐経が、祐親に伴われて権大納言平重盛に見参を果たしたのが仁安二年（一一六七）の秋であったとすれば、廿一歳で武者所の一藤に昇ったのは承安四年（一一七四）のこととなる。祐経が訴訟を本格的に展開していたのはこの頃であろうから、思い通りの裁定が得られず、妻をも奪われ、祐親父子の暗殺を指示する安元二年（一一七六）まで三年は

のである。こうした経過があったと想定するのにふさわしい歲月である。また「真名本」巻四には、文治三年（一一八七）、源頼朝の二所詣に随つて箱根権現にやつて来た祐経と宮王が対面する場面があるが、宮王は美男で若々しい祐経を「三十（二六）一・二者」と評したとされている。仁安二年に十四歳であったとすれば、二十年後の文治三年、祐経は三十四歳になっていたはずである。宮王が、若々しく見える祐経を、三十一歳で亡くなった父の面影に重ね合わせて「三十一・二者」と考えたとしても不思議ではない。これらのことから、祐親が祐経を平重盛の見参に入れたのは仁安二年、遅くとも同三年の頃であつたと考えてよからう。

清盛が太政大臣、重盛が権大納言に昇つた仁安二年、およびその後の数年間といえ、まさに平氏政権の全盛期に相当する。この時期に祐親は祐経を都に残したまま、平重盛家を領家に仰ぎながら伊東・河津両莊を独占していたわけである。兄の祐繼に不満を抱きながら河津莊で隠忍していた段階に比べて、祐親の勢力は飛躍的に伸びたといえる。そして、兄弟の母の第二の婚姻、河津三郎への再嫁はこの時期に行われたと考えられるのである。

また、孫娘を手元に置いていた狩野茂光がこの婚姻に主導的役割を果たしたことはほぼ確実である。とすれば、それは、時流に乗って急速に力をつけてきた伊東祐親との連携を意図したものであると考えられよう。「時威付」けて目代仲成を掣に取つた第一の婚姻の場合と同じである。一方、祐親側にしても、有力在庁として「介」の地位を世襲し、伊豆の工藤一族の本流であつた狩野氏と連携することは有意義だと思われたはずである。しかも、茂光の孫娘は相模国の横山党とも血縁関係を持っている。この婚姻は相模進出の選択肢を一つ増やすことにもなる。兄弟の母の河津三郎への再嫁は、狩野氏・伊東氏双方のこうした婚姻政策の所産であつたといえよう。

しかし、源頼朝の挙兵に当たり、狩野氏が源氏方、伊東氏が平氏方に立つて戦うことになったことを見てもわかるように、この婚姻は両者の連携を強化する手立てにはならなかった。少なくとも狩野氏にとっては、当初の思惑通りに事は運ばなかったのではないか。平氏を後ろ盾とする祐親の躍進ぶりに警戒感を抱くこともあつたかもしれない。また、祐親・

祐経の確執という伊東氏の内紛に関わりたくないという思いもあったかもしれない。そのあたりの事情は不明である。ただ、「真名本」巻二に見える「抑討河津三郎助通大見小藤太・八幡三郎、当国内云鹿野一処聞隠居由」という叙述^(三七)は示唆的である。河津三郎を討った大見小藤太・八幡三郎が逃げ込んだ場所を狩野荘としているのである。確かに、狩野荘は大見荘に隣接した地ではある。しかし、逃亡先として狩野荘を選んだというのが事実であったとすれば、二人は狩野氏に何らかの保護を期待していたと考えられよう。もっとも、「真名本」によれば、結局、狩野氏は大見・八幡にも、祐親にも手を差し伸べなかった。つまり、安元二年の段階で、狩野氏と伊東氏との関係は協調とも対抗ともいえぬ微妙なものになっていたということである。狩野氏は、これより先、源頼政が伊豆の知行国主として確認できるようになる承安年間以降、再び源氏とのつながりを重視する道を選んだのではないだろうか。

一方、伊東祐親にとって、相模の横山党と血縁関係のある兄弟の母を得たことは、狩野氏との連携強化には益しなかったものの、後に重要な意味を持つてくる。安元二年、祐親は所領相論の果てに嫡子の河津三郎を失う。後には一万・管王の兄弟が遺された。しかし、祐親の許には兄弟の叔父にあたる、河津三郎の弟伊東九郎もいたのである。将来にわたって、祐親・祐経と同じような叔父・甥の間の相論を根絶し、所領支配を安定的に継続していくためには、伊東・河津両荘を伊東九郎に譲り、一万・管王を他家に移すのが最善である。その際、兄弟の母に相模の縁故者がいることは大きな意味を持つ。しかも、前節で見たように、祐親は既に相模の武士団との間に婚姻ネットワークを築く努力を積み重ねていたのである。祐親が兄弟の母の第三の婚姻相手として、相模の武士曾我祐信を強く推したのは、このネットワークをいっそう充実させるという政策的な意図によるものといえよう。実際、後に、祐親と同じく平氏方の急先鋒となっていくのは、海老名源八季貞や荻野五郎ら相模の横山党の武士たち^(三八)であった。

以上のことから、曾我兄弟の母の婚姻は、狩野氏・伊東氏の軍事的・政治的な思惑、中央政界における平氏政権の動向、源氏と伊豆国との根強いつながり、所領相続をめぐる伊東氏の内部事情、祐親が展開していた相模の武士団との連携など

各種の要素が絡み合って、次々と推し進められたものであったといえる。

おわりに

以上、「真名本」の『曾我物語』に見える伊豆国の武士、伊東祐親の関わった婚姻を素材に、中世成立期における東国武士団の婚姻について考察してきた。その結果、武士団相互の婚姻関係が、個別の事例による多少の違いはあるにせよ、いずれも海上・陸上交通を通じたつながりや、中央や地方の軍事的・政治的・経済的動向と不可分に結びついて形成されたものであることが明らかになったと考える。これは、変転する情勢に敏感に反応しながら、自らの所領を維持・拡大しつつ生き延びていこうとする、中世成立期の東国武士団の一種の知恵であり、たくましさであった。

ただ、いうまでもなく、婚姻は武士である男たちだけの問題ではない。そこには、自分の力ではどうすることもできない運命に翻弄された女たちがいる。曾我兄弟の母は、自らの意志とは関係なく、生涯に三度の婚姻を経験しなくてはならなかった。「真名本」巻二によれば、彼女は曾我の里に移るに先立って、亡き夫河津三郎の墓に詣で、「暇申河津殿、童女性見^二亦人^一不^レ思、殿父伊藤殿御計移^三曾我里^一、童子共成^二遠守^一、侍^レ何可^レ奉^レ訪^レ後世^二」と涙を流しながら五輪塔にすがりついたという。他にも、工藤祐経との仲を裂かれて早川遠平に再嫁した祐親の次女、頼朝と別れさせられた上、愛児まで殺されて江間次郎に再嫁していった三女など、「真名本」には婚姻をめぐる悲話がいくつか盛り込まれている。武士団の婚姻政策の陰には、現実には多くの女たちの悲哀・苦悩があったはずである。文書や記録などの史料の文面には表れてこない、またそれが故に見落としてしまいがちなこうした女たちの情念を、「女語り」から発展した『曾我物語』は物語の形式を用いて見事に描き出している。そうした意味で『曾我物語』、とくに「真名本」は中世人の歴史を伝える貴重な史料の一つなのである。

注

(一) 本稿では、「真名本」については、角川源義編・貴重古典籍叢刊三『妙本寺本曾我物語』（角川書店、一九六九年）を用いる。「真名本」からの引用はこの書からの引用であり、注においてその所載頁を掲示する。また引用に際しては、編者が付したふり仮名・送り仮名は省略し、私に返り点を施すことにする。

(二) 「真名本」八六・八七頁

(三) 同氏『中世武士団』（『日本の歴史』第三卷、小学館、一九七四年、後に『石井進の世界② 中世武士団』山川出版社、二〇〇五年として再刊）

(四) 同氏「姻戚関係からみる『曾我物語』」（『季刊ぐんし』六五、二〇〇四年）

(五) 注（二）

(六) 注（三） 論考

(七) 注（四） 論考

(八) 『吾妻鏡』治承四年十月十九日条。なお、『吾妻鏡』は吉川弘文館刊行の『改訂増補国史大系 吾妻鏡』を用いる。

(九) 『続群書類従』六下。以下、『続群書類従』は『続群』と略記する。

(一〇) 「真名本」三五頁

(一一) 「真名本」一一頁

(一二) 以上に見た武蔵国における政治情勢については、峰岸純夫氏「鎌倉悪源太と大蔵合戦―東国における保元の乱の前提―」（『三浦古文化』四三、一九八八年）、木村茂光氏「大蔵合戦と秩父一族―源平内乱期武蔵国の政治情勢―」（『中世内乱史研究』一四号、一九九三年）、野口実氏「中世成立期における武蔵国の武士について―秩父平氏を中心に―」（『古代文化史論攷』一六号、一九九七年）、いずれも岡田清一氏編『河越氏の研究』名著出版、二〇〇三年に再録された論考参照。また、三浦氏に関しては五味文彦氏「相模国と三浦氏」（『三浦一族研究』二号、一九九八年）、高橋秀樹氏「三浦介の成立と伝説化」（『三浦一族研究』七号、二〇〇三年）など参照。

(一三) 「三浦系図」（『続群』六上）

(一四) 『吾妻鏡』延応元年十二月五日条

(一五) 没年は『吾妻鏡』元仁元年六月十三日条による。生年は同日条に「遂以御卒去^{御年六十二}」とあることからの逆算。

(二六)「真名本」八七・八八頁

(二七)注(四) 論考

(二八)「続群」七上

(二九)「続群」五下

(三〇)仁安二年七月七日条。『兵範記』は『増補史料大成 兵範記』を用いた。

(三一)安元二年四月廿七日条。『吉記』は『増補史料大成 兵範記』を用いた。

(三二)「玉葉」承安二年七月九日条。『玉葉』は国書双書刊行会編『玉葉』を用いた。

(三三)「真名本」一三頁

(三四)「公卿補任」仁安二年

(三五)「吾妻鏡」には、文治三年の正月の記事に頼朝の二所詣は見えず、文治四年正月廿日条に「二品立^ニ鎌倉^ニ、令^レ参^ニ詣伊豆・管根・三嶋社等^ニ給」とあるところから、実際には頼朝は文治四年の正月に伊豆権現・箱根権現・三嶋社の三社に詣でたものと思われる。

(二六)「真名本」七七頁

(二七)「真名本」三三頁

(二八)菱沼氏は注(四)の論考で「横山^ニ狩野両氏の連係が存在していたことは確認できる」と述べているが、氏が直接の根拠として示した史料は「真名本」巻五の①の、しかも増補されたと考えられる部分であり、史料の裏づけとしてはやや弱いように思われる。確かに、狩野氏と横山氏が婚姻を通じて連携していた時期はあったであろう。しかし、その後、兄弟の母は狩野氏の手に引き取られており、その後の婚姻にも横山氏が関与したという形跡はない。ある段階から両氏の連携はうまく機能しなくなったと考えるべきではないだろうか。兄弟の母が伊東氏の許に移ってからその傾向はいっそう強くなり、源氏方につくか、平氏方につくかといった政治的・軍事的方針の違いもあって、やがて横山党の武士たちは狩野氏と別の道を選択するに至ったと考えたい。

(二九)「真名本」三三頁